帝京大学 TEIKYO
本部広報課 TEL.03-3964-4162
〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1
http://www.teikyo-u.ac.jp/

信念が、世の中を変えていく。“One's way”でいこう。

iSM × 地域と歩む医療

撮影／茂谷康宏

地域に、人々に、共感できる心を育む

日本には、数にして10万を優に超える”祭り“が存在する。それぞれ趣が異なるのは、その土地で生きる人々の歴史や情念が込められているからだろう。

訪れたのは福岡県の最南端、大牟田市で開催された”おおむた『大蛇山』まつり“。江戸時代に起源をもち、市民が心待ちにしている夏の風物詩である。県外から訪れる参加者を含め、老若男女問わず、今年も多くの人で賑わっていた。

有明海からの西日が差し込む頃、歩行者天国となった目抜き通りで恒例の行事が始まった。”一万人の総踊り“である。『炭坑節』や『大蛇山ばやし』の音頭に合わせて踊り歩くが、参加しているのは住民ばかりではない。地元の企業や学校など80以上の団体も加わって約2キロにわたる列を成す。そのなかで、ひと際目立つ集団がお祭りムードを盛り上げていた。帝京大学福岡医療技術学部の学生と教職員である。聞けば例年200人程度が参加し、大牟田市内にあるキャンパスでの全体稽古を経て当日を迎えるという。踊り終えた学生に感想を聞いてみた。

「入学した年から毎年参加しています。もちろん楽しいからですが、どの学生も地域に貢献したいという気持ちが強いと思います。実習先となる医療機関でもお世話になっていますし、勉強ができるのは大牟田市があってこそ。とても感謝しています」

理学療法士、作業療法士、看護師など、医療スタッフを志す学生が集う福岡医療技術学部。めざしているのは、地域医療に貢献できる人材の育成だ。その一環として2005年の学部設置以来掲げているのが、地域への密着である。

ちなみに大牟田市は、高齢化する地方都市の象徴といえる。現在の人口は石炭産業で栄えた196 0年代からほぼ半減し、市民の3人に1人が65歳以上。学生にとっては、地域医療が抱える課題を肌で学べる環境といえるだろう。実際、認知症の方々の見守りや世界遺産を一緒に巡るメモリーウォーク※などにも、ボランティアとして積極的に参加している。祭事も含めて市民と交流する機会は少なくない。その狙いを、学部長を務める蓮尾金博教授に尋ねてみた。

「大事なことは、その土地で生きる人々を知ることです。より良い医療を提供するには、疾患だけではなく、背景にある患者さんの生活習慣や生き方を把握しなければなりません。その素地を養い、医療スタッフとなって赴任した地域への愛着を育むためにも、祭事やボランティア活動への参加は貴重な経験になると考えています」

この育成方針には、地域と歩む医療を実践するためのISM(イズム)が刻まれている。『育むべきは、共感できる心』。真のコミュニケーション力を身につけて巣立った卒業生たちは、夏を迎えるたびに大牟田の人々の健やかな姿を思い出すに違いない。

※メモリーウォーク／認知症に対する偏見を取り払い、理解を深めることを目的とした啓発活動(パレード)など

「学生の皆さんは普段からボランティアで大牟田市に貢献してくださり、とても感謝しています」と語る中尾昌弘市長(写真中央)。当日は参加学生と蓮尾金博学部長が挨拶に訪れ、一緒に祭りを楽しんだ。

例年7月下旬に開催されている“おおむた『大蛇山』まつり”。人が乗り、街中を練り歩く山車を『大蛇山』と呼ぶ。大蛇の歯に子どもを噛んでもらうと、その子に1年の無病息災が約束されると伝えられている。